

## パネルディスカッション「当事者の座談会：学生生活とLGBT」<sup>1</sup>

(2019年度関学レインボーウィーク)

性的マイノリティの当事者、当事者かもしれない学生から構成される関西学院大学非公認サークルCASSISに所属する現役生3名によって企画・実施されたプログラムであるパネルディスカッションが5月16日(木)の18時40分から20時まで、上ヶ原キャンパスの図書館ホールにて開催された(参加者:24名)。パネルディスカッションは、自己紹介やLGBTQに関する基礎知識、学生生活を含む日常的に経験する個人的な悩み、質疑応答といった流れで構成された。登壇者の3名はそれぞれ異なったセクシュアリティ(Xジェンダー、クエスチョニング、MTFトランスジェンダー)を自認し、個人的な経験を出発点としながら自らの思いや悩み、直面している問題などを語った。以下ではパネルディスカッションの中の一部を記す。

### LGBTだけではないセクシュアリティ

Xジェンダーを自認するAさんは、あまり知られていないXジェンダーについて「身体的性別にかかわらず、性自認が男にも女にも当てはまらない性」と定義して説明した。Aさんは、出生時に割り当てられた性別は女性だが自分自身を「女性ではないが、男性になりたいわけではない」という性自認を経験している。性的マイノリティの代表例としてLGBTが取り上げられることが多いが、LGBT以外にも多様なセクシュアリティがあり、人の性自認や性的指向には「境界がない」とAさんは語った。

Bさんは現在クエスチョニングを自認している。クエスチョニングとは、「性自認や性的指向を探している状態」を指すセクシュアリティであり、B

---

<sup>1</sup> 〈動向〉「第7回関学レインボーウィークを中心とした関西学院における多様性尊重の取り組み:Kwansei Grand Challenge 2039にむけて」(武田文, 織田佳晃)pp61-69『関西学院大学 人権研究』第24号(2020年3月発行)の一部を転載

さんの場合は性的指向がクエスチョニングであるという。これまではレズビアンであると自身で思い込んでいたが、大学入学以降様々な人と出会う中で「自分で自分のセクシュアリティを決めないことを選択した」と語った。BさんはLGBTコミュニティ内ではレズビアンとして、コミュニティ外ではヘテロセクシュアルとして認識されることがしばしばあり、どちらのコミュニティでも理解されないこともあるという。

### 男女で区分することは必要か？

AさんとMTFトランスジェンダーを自認するCさんは、当たり前のように男女で二分される仕組みに困難を覚えることが多いという。男女で二分される場面は、性自認と出生時の性別が一致しない、男女の既存のカテゴリーに当てはまらない性別を自認する人にとっては迷いや困難をもたらすことがある。Cさんは現在、大学のゼミ合宿と就活に関する悩みを抱えている。ゼミ合宿では部屋や風呂が男女分けになる可能性が高いことや、就活では戸籍上の名前と性別を変更していないことが大きな障壁になっているという。Aさんは、トイレや風呂、問診票などの身体に関することであれば「仕方ないかな」と思うものの、アンケートや履歴書などはどの性別を書くべきか悩むという。アンケートや書類などで不必要な性別欄は極力減らしていくこと、性別欄を設ける場合にはどの性別を聞いているのか(性自認、戸籍など)を明記していくことで、当事者が経験する困難を解消していくことに繋がるだろう。

### 親や親戚との関係性

LGBTQ当事者が抱える重要な課題の一つに親や親戚といった身近の人との関係性やそれに付随するカミングアウトに関する事柄がある。Cさんは、親との関係性は良く、カミングアウトもしているものの、関係性が良好すぎるがゆえに手術などに関する心配もされるという。Bさんは親にカミングアウトしておらず今後もする予定がない。親がLGBTに対して否定的な価値観を持っているが、「親は他人」だと思えることで、楽になったという。

Aさんは、日常的には本名とは別で自分が呼ばれたい名前（通称名）を使用していることが多いという。親との関係性は良好ではあるものの、LGBT への忌避感を持っているためカミングアウトはできないと感じており、今後も「平行線を辿ろうかな」と考えている。関学には通名制度があるが、通名制度を使用する場合には親などの家族が了承している必要があり、また関学から送られてくる郵送物には通名が記載される。つまり、家族にカミングアウトをし、理解を得ることがなければ、学内の通名制度を使用することは難しい。しかし身近な人のカミングアウトに対する拒否感が強い社会においては、親からの理解やサポートを得られるとは限らない。そのため、親などの家族からの理解を得られなくとも通名を使用できるような、より柔軟な通名制度を検討することが必要である。

#### 誰も否定しないために

登壇者 3名は小学校から LGBTQ やジェンダーに関する教育を行うことの重要性を認識していた。Cさんは、自身の義務教育課程の中で LGBTQ について学ぶ機会が一切なかった。学校の中で取り扱われないことで、社会から望まれていない、目を背けられる存在としてトランスジェンダーである自分自身のことを否定的に感じてしまったという。当たり前の存在として性的マイノリティを取り扱うことは、当事者が「堂々として生きていいんだ」、「普通に生きてていいんだって思える」ようになるために必要であると語った。また、Bさんは、他人を傷つけない限りにおいて自由に好きなことをしてもいいと考えており、そのためにはジェンダーのみならず、「～だから」といった様々な思い込みを解きほぐしていくことが重要であると語った。

#### ラベルを超えて

質疑応答の中で、「就職では何がストレスになるのか」、「どういう仕事・職場であれば働きやすいか」という質問が出た。この質問に対する登壇者の応答からは就職だけではなく、性的マイノリティの当事者もいきやすい大学を目指す上で重要なことが示されていた。Cさんは、アライを増

やしていく取り組みや LGBT 研修は大事である一方で、それが当事者の生きやすさを確実に保証するわけではないという。ではどのような関係性や場所であれば当事者を排除しないものとなりうるのか。C さんは「LGBT だから仲良くする」ではなく、「気が合うから」仲良くなるような関係性が望ましいと語る。A さんは、履歴書、スーツ、通名などで性別が二分化されることのない就活や職場が良いと思っているという。B さんは「～だから」といったことやハラスメントのないような場所であれば、カミングアウトしていない当事者も生きやすくなると語った。

日常的に行われる決め付けから、制度に埋め込まれた性別二元論などを少しでも減らしていくことが LGBTQ の当事者の経験する生きづらさの解消に重要だと、登壇者たちの語りからは示唆されているだろう。

なお、参加者からは以下のような感想をいただいた。

今まで、授業の中でジェンダーの話や LGBT の話は聞いたことがあったし、高校の時は FtM の人が講演をしてくださったこともありました。しかし、今日のように同世代の人からしっかり話を聞いたことはなかったので、言い方はよくないかもしれませんが、すごく興味深く聞かせていただくことができました。性自認や性的指向が違うことや、LGBT、I,Q,X,A,P など様々あることは知りませんでした。そして、障害者トイレが多目的トイレと呼ばれていることは知っていましたが、男女でわかれていたら意味ないということは本当にその通りだと思います。話を聞いていて、それぞれ悩みが違うこともあるし、共通する部分もあることがわかりました。どうすればよいかという意見は思いつきませんが、もっと差別や偏見がなくなること、そのためにまず知ることが大切なのかなと感じました。実際にすることは難しいだろうし、本人がどう感じるかだとは思いますが、人ということには変わらないし、男か女かという極端な分類が薄まっていけばいいなと思いました。私は、私の友だちがそうであっても、友だちには変わらないし、大事な友だちだと思っています。

性自認について、Xジェンダーの性自認が場面や時間でゆらぐ(?)のは初めて知ったので驚きました。私は中学校の時に女の子から想いをよせられたりしたことで、セクシュアルマイノリティについて知りました。みんなが異性を好きになるわけではないことは知っていたけれど、「彼氏おるん?」とか、そういう発言は今でもしてしまう時があります。自分にしみついた価値観や偏見を変えることは本当に難しいなど日々感じています。小学校にボランティアで行っていますが、女の子が一人称を「ぼく」と言ったことに対して、「〇〇ちゃんは女の子でしょ!?!」「私かうちやろー?」という返しがありました。小学校1年生のクラスでもうそういう男はこう、女はこうという価値観が根づいている子はたくさんいるんだと驚いたのと同時に、まだ多感でいろいろなことを吸収できるうちからジェンダー教育を行うことの必要性を感じました。小学校からジェンダー教育をという話がちょうど出ましたが、ジェンダーの取り上げ方で、今は「道徳」の範囲でしか扱われていないのは問題だと感じています。他国では保健体育や生物学的な学問で取り上げられているのを知って、言葉では言い表せないのですが、「道徳」で扱うのに違和感があります。セクシュアリティについてマイノリティの方に対してどう接したらいいんだろう?とか、何に気をつければいいんだろう?とか、たくさん考えすぎて、もはや接するのが怖いくらいに思っていたんですが、大学に入って当事者の子に会って、「人」として接すればいいんだと最近思っています。LGBT だからとか関係なくセクシュアリティに関する質問や発言は非常にセンシティブであることは認識すべきだし、これからも自分の偏見とは闘っていかないとと思っています。

ありがとうございました。今回、関学キャリアセンター職員としてもそうですが、一個人として一人ひとりが輝く未来を描くために私はどんなことができるのか、そのヒントをもらうために参加させていただきました。ただ、自分自身の認知も甘く、まだまだ知る必要性を感じました。今日は大変勉強になりました。